

プロメテウス解剖学アトラス

頸部/胸部/腹部・骨盤部

坂井建雄, 大谷 修 監訳

＜書評者＞ 小澤一史 (日本医科大学大学院教授・生体制御形態科学分野)

『プロメテウス解剖学アトラス』の第1巻として「解剖学総論/運動器系」が刊行されて以来、それに続く「頸部/胸部/腹部・骨盤部」の出版を、まだかまだかと大変に待ち遠しかったのは私だけではないだろう。第1巻でその図の美しさ、精密さがすでに示されていたわけであるから、続編の質が極めて高いことは想像に難くなかった。実際に本書を手にとり、そのページを開いて、思わず「にんまり」としないわけにはいかなかった。

「解剖学総論/運動器系」では、その名の通り「アトラス」としての役割が高い本であると感じたが、今回の「頸部/胸部/腹部・骨盤部」ではアトラス的な要素はもちろんであるが、「解説書」「教科書」的な要素が多くなり、特に基礎科学として解剖学的な見地から内臓学を学ぶとともに、臨床医学に直結する内容が豊富に散らばっており、

工夫がなされている様子がよくわかる。例えば間接喉頭鏡の観察像、呼吸による肺容積の変化や力学的な影響、胃粘膜の内視鏡像、種々のX線画像、臓器と神経支配の図などが、「ここ！」というポイントに示され、学ぶ楽しみを引き出そうとする著者の思いがにじみ出ている。内臓系が中心ということもあり、発生学的な説明や生理学的な機能面での解説も多く見られ、充実した「アトラス」になっている。最終章で扱っている「各器官に分布する神経・血管・リンパ管」では、非常に簡潔に単純化した内臓と神経、血管、リンパ管との関係が示されている。この単純化された関係図を見ながら、詳しい教科書の記述を読めば、これらの仕組みを能率よく身につけることができる。まさに「自ら学ぶ」ための道標としても利用でき、解剖学における少人数のチュートリアル

的学習などにも活用できると感じた。

さて、全体を見渡して感じたもう1つの点は、アトラスの図と解説が余裕をもって配置されており、適度な「空き」のスペースが設けられていることである。解剖学を学ぶ学生、医師、医療関係者、さまざまな学習者には、このスペースを大いに有効利用し、自分なりの学習情報を加えたりして、自分だけの、または自分流の『プロメテウス解剖学アトラス』を作成してもらいたいと思う。私自身、すでにこのスペースを利用して、例えば組織学的なプラスアルファ、生理学的なプラスアルファ、分子生物学的なプラスアルファ、臨床的なプラスアルファを書き込み、オリジナルなプロメテウス作りにはまりつつある。次の「頭部/神経解剖」も本当に待ち遠しい。

●A4変 頁392 2008年
定価 11,550円
(本体 11,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00571-5]
医学書院刊